

7 南薩の特色を生かした稼げる畜産産地の育成

酪農家の経営安定と自給飼料増産に向けた支援

成果の要約

- 1 牛群検定成績データを加工した分析結果の提供、それに基づく改善提案により、牛群、個体毎の飼養改善指導を行った。牛群検定成績の活用を始めた令和2年と比較すると、改善指導効果もあり、南薩地区（14戸）の生乳生産量（月平均）は、829t から 896t で約 67t 増え、経産牛頭数は、1,121 頭から 1,255 頭で 134 頭増頭した。
- 2 繁殖成績の改善が必要である重点農家では、繁殖改善及び経営改善提案を受け、発情発見率が増加し、それに伴い、平均初回授精日数は産次平均で 53 日短縮した。
- 3 スーダングラス不耕起栽培では、従来の耕耘区と比較して作業時間が約 3 割省力化出来、収量も 109%と優れていた。また、令和7年度に、WCS 用稲の増産が期待できる専用品種の栽培実証を行い、地域への導入を関係機関で検討することが決定した。（南九州市）

1 対象

- （1）管内牛群検定実施農家 14 戸
- （2）集落営農組織 1 組織

2 課題を取り上げた理由

- （1）酪農家の技術、経営改善に毎月の牛群検定成績データが有効活用されていないため、農家が理解、活用しやすい資料の作成が必要である。また、繁殖成績に課題がある農家は重点的に支援する必要がある。
- （2）粗飼料自給率の向上に向けた栽培技術の向上や作付面積拡大のための省力化、また、WCS 用稲の増産が期待できる品種導入の検討が必要である。

3 活動の内容及び成果

- （1）酪農家の経営安定支援
ア 牛群検定結果の有効活用による酪農家への支援

繁殖 Web システムからダウンロードした牛群検定結果を分析して、栄養状態や乳房炎（体細胞数）、繁殖関係を個体チェックし、飼料給与改善や発情見逃し、自給飼料成分の分析、淘汰更新、牛舎環境の改善、病気の治療の改善提案を行った（写真 1, 2）。

その効果もあり、南薩地区（14 戸）の生乳生産量（月平均）は、829t から 896t で約 67t 増え、経産牛頭数は、1,121 頭から 1,255 頭で 134 頭増頭した（図 1）。



写真 1, 2 農家への普及指導活動風景



図 1 生乳生産量（月平均）と経産牛頭数

- イ 重点農家における繁殖管理及び業務改善指導

繁殖成績や飼養管理改善に向けて ICT メーカーを含めて連携を図り、作業の見直しや、繁殖管理アプリの有効活用などの現状の作業体系をチェックし、課題整理した。その結果、家族間の情報共有がなされ、繁殖アプリを有効活用が出来、発情発見率が増えた。それに伴い、平均初回授精日数は産次平均で 53 日短縮した（図 2）。

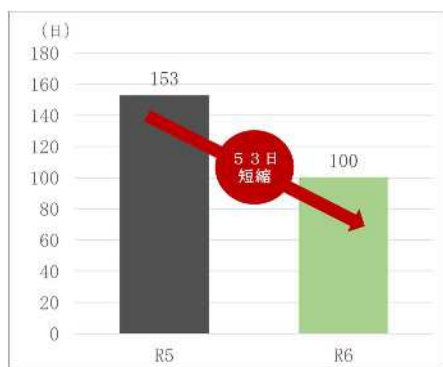


図2 平均初回授精日数（産次平均）

(2) 自給飼料増産に向けた支援

ア スーダングラス不耕起栽培の導入・実証
集落営農法人土里夢たかたが令和6年度から行った、不耕起播種機を利用したスーダングラス栽培（写真3）の省力化と収量確保について実証した。不耕起栽培では、耕耘作業と作業の一体化により深耕（プラウ）と耕耘（整地）を行わないため、従来の耕耘区と比較して作業時間が約3割省力化出来た。また、収量も109%と優れていた（図3）。この結果より、オペレータからは、従来の耕耘・整地の組作業から、1人で作業できることが大きなメリットであり、次年度作付面積を拡大することとなった。



写真3 不耕起播種機によるスーダングラス播種



図3 収量と作業時間

イ WCS 用稲専用品種の導入に向けた検討
現状の主食用米 WCS「コシヒカリ」「イクヒカリ」の収量調査を実施した。

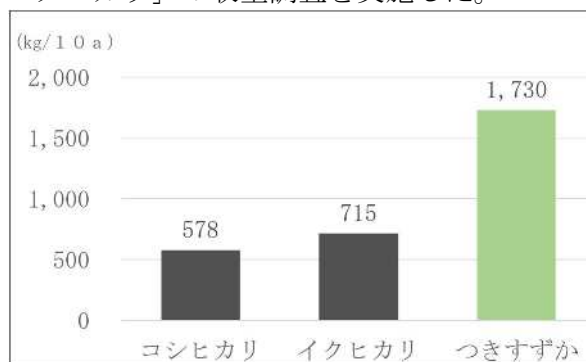


図4 10aあたり乾物重量

県内でも利用が進みつつある WCS 用稲専用品種と比較すると、収量が低いため（図4）、今後水田での飼料増産のために、令和7年度からは、WCS 用稲専用品種「つきすずか」の栽培実証を行い、南九州市地域再生協会を含めた関係機関と協力し、地域への導入を検討することとなった（写真4）。



写真4 自給飼料増産検討会

4 今後の課題

- (1) 自ら牛群検定を活用する農家の育成
- (2) 重点農家の継続支援
- (3) 不耕起栽培による収量確保の継続実証（排水対策）
- (4) 地域での WCS 用稲専用品種導入の可能性検討
- (5) 収穫物の成分や牛の嗜好性の調査
- (6) 集落営農組織の収益向上支援（地域計画支援）

5 担当した普及職員（○はチーフ）

○福元，田端，江籠